

チンパンジーは自己の名前を認知していることが明らかになった。実験 2 では、全個体で該当名に高い反応率が見られたが、3 個体を除き有意差は見られず、話者の姿が見えないとき、明らかな名前認知は示されなかった。話者の姿が見えるときの方が、該当名と他個体名を弁別しやすいと思われる。以上から、該当名に関しては、話者の姿の有無に関わらず自己の名前認知が可能であるが、ある程度、話者の存在という視覚的な情報がその認知に影響を与えていると考えられる。

自由 20

老齢ザルにおける認知機能低下の特徴—前頭葉に関する課題を用いて—

久保 南海子（日本女子大・人社・心理）

老齢ザルは何種かの認知課題において、若齢ザルと比較して成績の低下が報告されている。それらの結果は、その認知機能に関係する脳領域の加齢変化を反映していると考えられる。そこで今年度は、主に前頭葉が関与していると思われる位置再認課題（Delayed Non Matching-to-Position）の転移学習の実験を行い、空間認知の学習セット形成における加齢変化を検討した。対象個体は前年度の実験で用いたニホンザルで、老齢個体 4 頭（メスのみ、24・25 歳齢）、若齢個体 3 頭（メス 2 頭、4・5 歳齢、オス 1 頭、8 歳齢）を用いた。

原学習：5 秒の遅延時間が挿入されていた。獲得までに要した平均試行数は、老齢群（443）の方が若齢群（180）よりも多かった。転移学習（6 種）：基本的な手続きは原学習と同様だが、位置刺激の呈示数や Object が変化した。若齢群は転移後、即時に再獲得した。老齢群は転移後、第 3 課題まで若齢群よりも有意に多くの試行数を再獲得に要した。

以上の結果から、老齢ザルの空間認知における学習セット形成は確認できたが、それは若齢ザルに比べて遅いことが明らかになった。(1) 空間認知は記憶的負荷が挿入されると顕著に阻害される。(2) 既に獲得したルールは限られた条件場面に依存しており、異なった場面で適用することは可能だが、そのためには若齢サルよりも多くの経験を要する。

自由 21

ワオキツネザルにおける音声の指示機能についての実験的研究

小田 亮（名古屋工大・工）

伊豆シャボテン公園（静岡県伊東市）において飼育されているワオキツネザルの集団を対象として、個体の識別、社会行動等の調査など、基礎となるデータの収集を行った。

また放飼場のなかで木のあいだにワイヤーを張り、猛禽類のシルエットを滑らせ、反応を調べたが、結果はほとんど警戒音の発声や回避反応がみられなかった。シルエットの形や滑らせるスピードなどに改善の余地があり、今後の課題であるといえる。また、実験とは別に自然な状態でどのような場合に警戒音の発声がみられるかについて観察した。園内で飼育されているインドクジャクに対しては対猛禽類の警戒音を発するが、クジャクが飛んでいる場合と近くの枝にとまっている場合では若干の違いがみられた。また最近園内で放し飼いにされているチャイロキツネザルに対して対肉食獣の警戒音をあげるところが観察された。どのような基準でかれらが警戒音を使い分けているのか、今後観察によっても明らかにしていきたい。

伊豆シャボテン公園の個体群との比較のため、八重山民俗園（沖縄県石垣市）において飼育されているワオキツネザルについても予備調査を行った。現在この個体群は一部の移動が予定されており、本格的な調査は移動の詳細が明らかになるのを待つことになった。またネオパークオキナワ（沖縄県名護市）の飼育個体についても予備調査を行った。